神栖ディスカバリー File 03

特集

市民を守る

消防署の最前線に迫る

今年の9月1日で関東大震災から100年となります。そこで今回は、「防災の日」にちなみ24時間365日、休むことなく災害に備える神栖消防署を訪ねました。消防署の仕事は、そのすべてが市民の命と財産を守ることにつながっています。

コンビナート災害にも対応

サイレンを響かせてまちを走る消防車や救急車。行き先が気になって目で追ったり、運転中なら速やかに道を譲ったりした経験があるのではないでしょうか？　そんな誰もがよく知る存在でありながら、どのような活動をしているのか、どういう装備があるのか、あまり詳しく知られてはいない消防署のしくみ。そこで今回は神栖消防署を訪ねてみました。

鹿島地方事務組合消防本部には5つの消防署と1つの分署があり、その中で一番大きいのが神栖消防署です。特徴の一つは、コンビナート災害対応の3点セットと呼ばれる大型高所放水車・大型化学消防自動車・泡原液搬送車を有していること。もう一つは、非常勤の医師が救急隊に専門的なアドバイスをしていること。これらは全国的にみてもまれなことであり、非常に高水準な備えであるといえます。

さて、消防署のいろいろな仕事の中で、まず、いざというときに出動する消防隊、高度救助隊、救急隊をご紹介しましょう。

消防隊　火災を消し止める！

火災が発生したとき、消火のため真っ先に駆け付けるのが消防隊です。火災調査係長の菅谷朋之（すがやともゆき）さんに、出動までの動きを聞きました。

「消防指令センターから出動指令が出ると、まず画面上で火災の場所を確認。一番近くの消火栓がどこにあり、どの車両がその消火栓を使用するか、さらに要救助者の有無などを確認して中隊長が活動方針を決めたら、防火衣を着て消防車に駆け乗る。そこまでを2分以内に行ないます。夜中に出動指令が出ることもありますが、仮眠中でもぐっすり寝ている隊員はおらず、すぐ体が動きます」

火を消して終わりではなく、その火災の出火原因を調べるのも重要な仕事です。一番燃え方が激しい場所を調べ、住人からも事情を聞き取って原因を探ります。

他にも、ガスなどの危険物が漏れ出したときの処置、救急隊の支援、ドクターヘリが離着陸するときの安全確認など、さまざまな場面で消防隊が出動しています。

①左から春秋（はるあき）総務グループ総括係長、菅谷さん（消防隊）、内野さん（救急隊）、高木さん（高度救助隊）　②高所での訓練施設　③④特殊な資機材を使用した訓練を行なう高度救助隊　⑤コンビナート災害対応の特殊な車両を所有している

高度救助隊　災害現場で人を助ける！

救助隊（レスキュー隊）は、火災や事故、自然災害などの現場で、逃げ遅れた人や動けない人を救出するのが主な任務です。平成30年9月1日、神栖消防署に配備された高度救助隊は救助隊や特別救助隊よりもさらに特殊な資機材を持ち、めったにない困難な事案にも対応できる部隊です。隊長の高木源史（たかぎもとふみ）さんに、その任務や装備について教えていただきました。

「高度救助隊の隊員16人は〝要救助者や一般市民の目線に立って活動する、機動力ある救助隊〟をモットーに、起こり得るさまざまな災害を想定して日々訓練をしています。特殊な資機材は、胃カメラのように建物の中を見る画像探索機、要救助者のかすかな声や音もキャッチする地中音響探知機、火災のときに要救助者を見つける熱画像直視装置、暗闇でも見える夜間用暗視装置、人が揺れを感じる前に知らせる地震警報機などがあります。現場で救助した方が無事に回復したという知らせをいただくと安心します」

救急隊　救急車で病院へ運ぶ！

病気やけが、事故などで119番通報したときに駆け付けるのが救急隊です。火事や災害のときに消防隊や高度救助隊と一緒に出動し、救助された人を病院に運ぶのも救急隊の役割。1日に平均7回出動し、消防署で最も忙しい部署です。救急救命士の内野孝（うちのたかし）さんに仕事の様子とやりがいを尋ねました。

「救急救命士を含む3人の隊員が救急車で出動し、病人やけが人を手当てしながら急いで病院に搬送します。救急救命士は医師の指示を受けて、心臓や呼吸が止まっている人に気管挿管による気道確保や点滴などの処置を行なうことができます。搬送した方が後日お礼を言いに来てくれたり、小学生から感謝の手紙をもらったりすることもあり、とてもうれしく励みになります」

ひっきりなしに出動指令が続く日もありますが、それでも「何か体調がおかしいと思ったら、すぐ119番してください」と話す内野さん。病人やけが人の命を救い、その家族や周囲の人の心にも寄り添える活動を心がけています。